

## 營衛と兩焦

—三焦概念の変遷についての考察—

林 孝信

日本内経医学会

従来より古典医学における「三焦」は、実体の存在が疑われ、多くの注釈家による様々な説が提出されてきた。しかしこれまでは、時代の変遷により語義や概念が変化してゆくことでその本質を明らかにしようと試みるものはあまりいない。『素問』『靈樞』には時代の異なる文章が採録されているため、語の変化の過程を辿る研究方法が適切であると思われる。

「三焦」は、古くは「膀胱三焦」と言い、拡がる機能と絞る機能を併せもつ単独の泌尿器であった。その後「膀胱」と「三焦」に分離し、それぞれ独立した器官になる。そして「三焦」は「下焦」に名称を変更する。本論は「三焦」がどのようにして「下焦」に変化してきたかを辿るものである。

「三焦」の概念が大きく変化するきっかけになったのは「營衛」の語が医学に導入されてからのことである。それまでにあった「清濁」はもともと血液の性状を表し、それが胃に由来する気によるものであると認識されていた。当時に流行していた天人相関説の影響を受け、医学では四時や昼夜に感応する人体内の循環を想定する必要が生じたのだろう。「營衛」は、兵家では巡回警備する意味の用語であったが、医学では脈内で栄養し脈外で外邪からまもるための循環する気とした。「清濁」は胃の内部で消化されたものの性状であるが、「營衛」はそれから生成された精微な気としたのである。

『靈樞』五味篇では、水穀が胃に入り、その精微なものが「胃之兩焦」に出るとある。この營衛のもととなる「兩焦」と、尿をコントロールする「三焦」はパラレルな関係になっている。また『靈樞』五味論篇の「上之兩焦」は、衛気を生成する「上焦」と、營気を生成する「中焦」を併せたものである、としている。言いかえれば「兩焦」は「上焦」と「中焦」に分化していったとも言える。このことについては『靈樞』四時気の「胃脘」と「上脘」「下脘」の関係と類似している。また他に「下脘」と「下焦」が混同されている例もあるので、胃の「上脘・下脘」が「上焦・中焦」のもとになった可能性も否定できない。

その五味論篇では五味それぞれの説明に「上之兩焦・中焦・上焦・三焦之道・上焦」の語を用いる。「上之兩焦」とは「上焦」と「中焦」のことなので、これらを整理すると「上焦」「中焦」と「三焦」の三つとなる。しかし後に「上・中・三」では違和感を覚えて「上・中・下」にしようとする気運が高まったのかも知れない。そのために『靈樞』營衛生会篇で「上焦・中焦・下焦」の概念がまとめられたのだろう。これ以降「三焦」の語は「下焦」に名称を改められることになった。

この營衛生会篇では、「上焦・中焦・下焦」のそれぞれを説明する場面で黄帝が問いかける。「三焦の出る所を聞きたい」「中焦の出る所を聞きたい」「下焦の出る所を聞きたい」。この冒頭には「三焦」とあるが、従来は三つを総称しての「三焦」だと考えられてきた。しかもこの箇所は『素問』『靈樞』のなかでも唯一、「上焦・中焦・下焦」の三つを「三焦」と言っているのである。しかしここは「上焦」とすべき所を誤って「三焦」と表記したのかも知れないとも考えられる。もしそうであるとするならば、『素問』にも『靈樞』にも三つを総称したものを「三焦」とは言っていないことになる。正確に言えば、「上焦・中焦・下焦」を「三焦」とするのは『太素』『難経』の出現を待たなくてはならない。